

七竈の実が暫く振りを見ると真っ赤に色づき始め、葉も心なしか黄ばみ始めたようだ。材が堅いため細工用に利用されることがあり、和名の「ナナカマド」は、「七度竈に入れても尚燃えない」ということから付けられた。

さて、今回の「朔東から」のタイトルだけを見ると当の本人はさぞかし、カラオケ大好き人間なのだろうと誤解を招きそうだが、正真正銘の生まれつきの音痴である。

御当地ソングをどう定義付けるか、夫々の街の地名や名所を随所に織り込んでいることが絶対条件だろう。曲名であろうが、歌詞であろうがそれは構わない。

さて、音楽隊や関係各方面に色々と調査して貰った。どれ位の数があるか見当が付くだろうか。市町村歌を除いて、50強に上るから驚きである。

音頭や小唄は郷土の歌ではあっても、御当地ソングと言うにはやや抵抗感があるので、〇〇音頭や〇〇小唄と市町村名を冠した歌は、18個ある。市町村を紹介しよう。帯広、本別、鹿追、新得、清水、池田、浦幌、音更、豊頃、十勝港、大樹、芽室、常呂、東藻琴、津別、弟子屈、美幌等である。音頭や小唄は十勝管内に多いのだが、何故かは解らない。

① 『知床旅情』（作詞・作曲：森繁久弥）

師団管内の地名を織り込んだ御当地ソングの筆頭は、『知床旅情』である。森繁久弥及び加藤登紀子が歌って一世を風靡した余りにも有名な歌だ。管内各部隊は転出者を送るときこの曲を掛けて別れを惜しんだと言う。森繁久弥氏が知床でのロケのときに地元の人にお世話になったので作詞・作曲したものだと言われている。

② 『美幌峠』（作詞：志賀貴、作曲：岡千秋、歌：美空ひばり）

知床旅情ほど多くの人に愛唱された訳ではないが、天才歌姫 美空ひばりが歌った歌があるそれが『美幌峠』である。医者でもある作家志賀貢の小説、「美幌峠で逢った女」にある歌詞だが、これが美空ひばりの耳に届き、彼女から歌いたいと依頼があり、それが実現し、1986年（昭和61年）リリースされたものである。彼女は美幌町での公演を約束していたが、それを果たせぬまま黄泉の国に旅立った。この歌は傷心の歌であり、当時の美空ひばりに共通するものがあつたのではないかと推測されている。美幌峠には歌碑がある。

③ 中標津町在住の作曲家牧野昭一の北海道讃歌

赤いグラスで一世を風靡した作曲家牧野昭一氏は、偶々カラオケ大会の審査員として訪れた中標津町に一目惚れし、中標津町に住を移し、そこで、北海道に思いを込めた作曲活動を精力的に行っている。その1つが「択捉」である。岡千秋作曲である。この歌は、択捉で生まれ育った彼の母に対する「母の日のプレゼント」でもある。即ち、母を思い、母に捧げる慕情歌である。これ以外には、「大地の風に」「大草原響太鼓（愛称：別海母ちゃん太鼓）」「標津川慕情」、ソルトレイクシティ参加の常呂町の依頼を受けての「諸人よ挙りて」等がある。道民愛唱歌「明日は明るい太陽が昇る」をも。

- ④ 有名な歌手（小生が知っていると言う位の意味であるので、念の為）が歌っている歌
 ①、②は除く。倍賞千恵子「別海讃歌」（別海の四季の唄）、ボニージャックス「別海町歌」、
 都はるみ「鹿追音頭」、美川憲一「釧路の夜」、松原のぶえ「愛冠岬」、
 殿様キングス「帯広ラブソディ」
- ⑤ 歌の情景になりやすい雰囲気を持つ釧路及び美幌
 釧路の街よ（作詞・曲：梅津三郎）、釧路の夜（作詞・曲：宇佐英雄）
 釧路川（園部晃治作詞、船村徹作曲）、釧路の駅でさようなら（宮川静夫作詞、愛田一雄作
 曲）等々 霧の街、幣舞橋、道東一の人口、港町であること等は歌になりやすいのかも知れ
 ぬ。
 また、美幌は、その地名に「美」を有するが故に、歌詞や曲名として適しているのかもしれぬ。
 既述の「美幌峠」の他、美幌哀歌（歌：新川二郎、1964年頃）、美幌ブルース（歌：北海道
 出身の高音演歌歌手 日高一也、昭和 59 年リリース）、「風はみどりに」（加藤悦郎作詞、和田
 香苗作曲、歌：有田浩二、美幌を歌った歌）がある。
- ⑥ その他
- 帯広の夜（昭和 40 年頃、山本ひろし作詞、歌、クラブグランドアローのテーマソング）
 - 北国の街「帯広」（作詞：松原義輝、作曲：田代広和）
 - まりも慕情（作曲：門太郎）
 - 納沙布岬（トンネルズ：失恋して行き場のなくなった女の行く岬？）
 - 幸せにかける橋（作詞：横井弘、作曲：飯田三郎）
 - 網走ブルース（作詞：太田武彦、作曲：桑山真弓）
 - 能取岬（作曲：広岡卓）
 - クッシーとネッシー（作詞：前川市次郎、作曲：牧野民治）
 - 北緯 43 度の町（作詞：検校雪乃、作曲：林信一）
 - 石北峠（作詞：高木隆春、作曲：桑山真弓）